

the spirit of the times

リベラルな雰囲気を望む

1978年経営開発委員 元 水戸市長

故 佐川 一信

私が青年会議所に入った74年に、たまたま読売新聞に掲載された”さえない青年会議所”という投稿解説記事が、今日まで記憶から消えていない。趣旨そのものは、その年の参院選挙における糸山英太郎の大量の選挙違反、森下泰氏の予想外の苦戦が、青年会議所の組織体質との関連で批判されるというかなり一面的なものであった。しかし某財界幹部の意見としてファシズム的体質の危険性を指摘した発言が妙に気になり、看過できなかったのである。何故なら仮にかかる批判を少しでも妥当し、それを自ら克服する道筋を探し出せないならば、青年会議所は明らかに社会的に有害な団体に転化するからである。

3年前に”少年の集い”に招かれた永六輔氏が我々に会場中央の「日の丸」の旗を降ろすよう求めた事件を記憶している会員は多かろう。多少の曲折があったものの結局永氏の強い抵抗にあって、我々が屈した事件について、その後何の総括もなされなかった事は残念なことであった。

永氏の主観的意図はともかくこの事件から引き出すべき教訓は二つあったように思われる。一つは、私もふくめて永氏ら世代の戦争体験者は、アジア侵略と言う日本ファシズムによってもたらされた痛恨の国家的シンボルが「日の丸」であったという感性を今もなお持続しているということ、二つは、日常的に何の疑いも持たないで行っている我々の様式や規範が、実は社会一般からみれば異様であり、しかもそれがいつしか規律化されている危険性を問うものだったということである。前者は「日の丸」をめぐる社会的テーマであることからここでは捨象するが、後者は特殊青年会議所自身の問題であるから、一言附言しておかなければならない。

つまり今日おびただしい会員増加は一方で意識の多忙化を不可避的にし、他方で会員一人一人の存在感を希薄化し分極化している。こうした疎外現象のなかで「日の丸」やJC旗に敬意を表して行うJC歌や綱領唱和だけが、統一性の唯一現実的な指標になりつつあることは社会的に異様な方法を十分な検討もなしに規律化している最たるものというべきである。また例会出席義務制度や理事長を中核とするワンサイドの組織運営は、人間の結びつきを外的に規律し且つ一元的支配に転化しうる危険な規範である事を指摘しないわけにはいかない。

我々青年会議所が、独立した人格と個性の、自由な結合と出合いの場として存在し、会員の相違性と多様性を認めた上で総合的な力量を引き出すことのできるリベラルな団体になるよう望み、そのために努力したいと考えている。